



大方あかつき館報

第11号
2005年3月発行

あかつき

上林暁の人と文学（三）

高知県経営者協会前専務理事 松本秀正

五、上林文学を読む

「野」

「野」は、ドラマも筋立てもなく、叙述の中で回想場面が繰り返され、夢想から現実への転回など特異な小説ですが、作家の苦悩や孤独、悲しみや喜びなどのテーマを鋭く追究した作品で、その張りつめた文章による充実した表現は、読者を強く引きつけて離さない傑作だと思います。

神学校

「私」は、故郷の父母の「有為な人物たれ」という期待を双肩に担って上京しながら、文学への希望は報われず敗残の身を持って余し晩秋のある日の午後、あてもなく野を歩いていた。通りかかった一人の未知の神学生を見て、彼のひたむきな表情や歩きぶりから青春を感じ、羨望にかられるのです。

「私はその姿（神学生）を見たとき、自分の半生を空しく荒廃させてしまったと思う悔恨で胸の焼かれる思いがした。自分にもかつては、あのような青年時代があった。しかし、自分は何一つひたむきな献身も敬虔な感情も経験せず、うやむやのうちに青春を過してしまった。」

「私」は野をさまよいながら神学校を探しあて、閑寂な構内のベンチに腰かけて荒んだ心を慰めます。その後もベンチの所へ行く度に、生活の辛さや家庭の重さから解放されるような気分になるのです。

ある日構内に入ってくると、無数の小鳥の囀り散らす声がそこらの空気を満たし、眩暈がするほどでした。その小鳥の一群が芝の上に降り、目の前に正体を現した時、一体何の鳥だろうかと思うのですが、そのうち、雀であることに気づき、その時の精神状態をつぎのように書かれています。

「私の荒んだ心は、雀の姿すら心に留める余裕など持たなかったにちがいない。だが、何年見ないにしても、雀のような日常的な鳥を神学校の庭で遊んでいるというだけで、何か神秘的な鳥のように思いこもうとしていた私の精神状態を、どう説明したらいいだろうか。」
ところで、今まで「私」が神学校を訪ねた日は、いつ

も灰色の霽に包まれて、陰気で曇った日ばかりだったやうな気がするのですが、一番最近訪ねた日は、これまでとは似ても似つかない、美しく輝くような小春日和でした。
「私」はいつもと少し勝手がちがう気持ちしながら、校内から畑の方へ出てくると、神秘的な世界から現実世界へ戻り、場面が一転して、そこにはいきいきとした精密な風景が描き出されます。

「向こうの櫟林の裾を茶色のジャンパーを着た学生風の男が、空気銃を提げて歩いている。ずっと遠くの文化住宅の裏手の畑では、若い女が蹲って毛糸を編んでいる。彼女の膝の上の毛糸の玉が赤く見える。」

白い柵

つぎに出てくるのは、白い柵です。

「私」が、初めて野を横切ったのは四年前の早春。妻子と家財道具などと一緒にトラックに乗り込んで、親戚の家から現在の家に移ってくるのですが、その途中で、白い柵の囲いの伸びているのが目に留まります。

あの白い柵はなんだろうと、「私」は、野のことを思う度に心から離れなくなり、いつの間にか空想と憧れを持つようになります。

ある日、牧場のそばを通り、白い柵を見た時、麦畑の上には盛んに陽炎が立っていて、ぼんやりとしているのですが、そこを馬に乗った人がこっくりこっくり柵のまわりを動いているように見え、白い柵のところにメリーゴーランドがあるように思われるのです。

九月に入ると、「私」の健康は急速に衰え、体重は下降し、寝汗と微熱に苦しむのですが、寝ている時も、白い柵のこと、メリーゴーランドや馬に乗った人のことを思ったりします。

その頃から、「私たちの生活全体が奈落に落ちるやうに落ち」て、経済的にも精神的にも追い詰められて行く姿が描かれます。十年ぶりに古い友人夫妻が訪ねて来た時、夫妻の応対ぶりに「私の妻」は気圧されて、ろくに口も利けない有様で、惨めな思いをするところが語られています。これを伏線として「野」の最後のところで、妻の発病について悲しく回想されます。

何ヶ月が経って、「私」は元氣を取り戻し、野へ出かけます。白い柵を訪ね、その正体を見たいと胸を躍らせながら柵の中へ入って行きますが、その日は、誰も馬を乗りまわしている人は見えなかつたります。少し行くと、そこに「西郊乗馬倶楽部馬場」という看板が立っていたのです。

白い柵は、メリーゴーランドのような歓楽場ではなく、乗馬倶楽部の馬場だったのです。長い間空想し、憧れていた夢が破れたのですが、その時の思いをつぎのように書かれています。

「私は柵にもたれて、暫くそこに立っていた。私の夢は呆気なく破れたけれど、夢が破れてみるとまた、その馬場一帯がなんだか明るく、よく乾き、改めて私の心を惹き始めるのであった。」

夢が破れた時の落胆やショックはいかに大きかったか、しかしそれを超えて、次の何かを求めようとする健かさ、精神力の強さに驚かされるのですが、ここに作者の真骨頂があるように思います。

ここで、乗馬倶楽部の一つの出来事を鮮やかに描いたところがありますので、そこを讀んでみます。

「馬場の中の銀杏は、幹のまわりいっぱい黄色い葉を落していた。時々砂を積んだトラックがどこからかやってきて、砂を撒いた。一度そのトラックが柵の入り口に乗り入れる時、入口のそばに立った若い銀杏の幹に突き当たった。銀杏はありつたけの葉を振るい落とし、トラックの砂は黄色くなった。風のない曇った夕方であった。」

Z池の楽しい思い出

十月の終り頃、「私」はかねてから行ってみたいと希望していたS池を訪ねます。森に囲まれた静かなS池のほとりの茶店で、テーブルの椅子に腰かけて、四年前に友人のKさんとA君の三人でこのS池に遊びに来ようと約束しながら、「私」が病氣になったため一緒に来ることができなかつたこと、またその年の夏、三人でZ池へ遊びに行つて楽しかつた日のことなどの思い出に耽るのです。

この回想シーンは、「野」の中で最も落ち着いていて、

時間がゆつたりと流れ、長閑な田園風景が描かれます。

路ばたの板塀に「生卵アリマス」と書いてあるのが目を惹き、農家へ入って行って、おばさんから古新聞の袋に入れた卵を買います。三人はそこを出ると、卵を一つづつ持つて、石の角などに打ちあて殻を割り、仰向けになつて卵のみを嚙り込んだ。「なんだか心が解放されたようで愉しかつた。」素晴らしい表現ですね。

つぎの文章も精緻極まる描写です。

「少し歩いて行くと板橋があつて、きれいな水が藻を揺りながら流れていた。(中略)私達は代わる代わる水の中に入つて、埃のついた足を冷やした。黒いオハグロトンボの群が、流れの上でかすかに風に逆らいながら、同じところをひらひらと飛んでいた。」

妻の病氣

最後に、「野」について最も悲しい思い出が語られます。

夏になつて、妻が激しい神経衰弱に陥り、Z池の北にある野の果ての静かな病院へ移送される所が描かれます。

「眠り薬を注射された妻は、病院自動車の中に眠り、薬のために咽喉が乾くのか頻りにつばを吐き散らした。何を念ずるのか病院に着くまで、胸の上の合掌を解かなかつた。家には、その朝雇つたばかりの派出婦に三人の子どもを託してあつた。」

私は妻の顔を見ていることが出来ず、窓の外にばかり眼を外らしていたが、天日もために昏くなるような氣持がして、夏野の景色も何も眼には映らなかつた。」

三月ばかり病院にいと、妻はすっかり元氣を回復したので、自動車に乗せ、秋の姿になつた野を横切つて帰ってきます。

妻が病院から帰つて間もなく、二の酉でした。「私」は夕食後、大鷲神社へ出かけ、祭りの店でお守りのついた小さな熊手を買います。そして「野」のラストは、つぎの文章で結ばれています。

「私は熊手を持つて、ひどく嬉しくなつて、すぐ家に帰つてきた。家に帰ると、冗談ともつかず本氣ともつかず、妻や子どもや自分の頭に熊手をのせ、今までは病氣

やなんかしてどうもよくなかつた。来年は一つ幸運を授かるうじやないかと言つて、高く笑つた。」

「野」を讀んで思ひますことは、上林文学の特色でもあるのですが、題材が深刻なのにもかかわらず、文章は透明で、簡潔で明るく、陰惨な感じがしません。それはどんな苦しいことに直面しても、意志を貫く強さと、人生を肯定する思想が根底にあるからだと思ひます。

(次号に続く)

上林曉あるいは上林文学を語るとは

園田学園女子大学非常勤講師 中村清治

ここ数年、全集を通じて上林曉の著述に触れ、また私自身僅かではあるが上林に関する文章を書いてきた。その中で感じたことをここで思ひつくまに述べてみたい。まず、興味深く感じたのは、上林曉を私小説家とするその評価の根強さである。

例えば、近年における一つの例として、「上林曉は昭和文学における生え抜きの私小説家であり、すぐれた短編作家である」とする神田重幸氏の意見(「上林曉論—私小説家の道程—」)、「解釈と鑑賞」平成十一年四月)に見るまでもなく、上林を私小説家とする評価は定説である。だから、上林を、あるいは上林文学について語る多くの文章を讀んで感じられるのは、上林は紛れもない私小説家であるとする当然の前提である。もつとも、私自身も上林本人がそう言っているのだからそうではないか、と問われれば、まあそうなのだろう、とは答えるつもりであつて、したがつて、ここで私が興味深く感じたのは、上林が私小説家であるか否かその評価の可否についてではなく、むしろ、そのように上林曉を私小説家と見做すことによつてもたらされる語られ方そのものである。そもそも、上林を私小説家とするその背景には、いわ

ゆる「病妻もの」と呼ばれる作品に描かれる精神を患った妻との苦闘や、晩年の闘病生活の中での執筆など、困窮した生活状況にありながら、にもかかわらず文学への意欲だけは強固に持ち続ける上林の文学に対する姿勢がある。確かに、晩年半身不随となり寝たきりになりながらも妹睦子氏の助けをかりながら執筆する姿などは、私たちに對して強烈な印象を与えるものである。あるいは、そのような姿に、小説を書くということへの作家の執念をまざまざと見せつけられた思いにとらわれ、私たちは暫し言葉を失うのではあるまいか。事実、上林の作品について語る文章の多くは、そのような作家の印象を起点として自身の読後感を語っているように思われるのだが、もちろん、そのように語ることが間違っているなど、ここで申し立てようというのではない。それどころか私もまた、そのような印象を持つ者の一人だからである。

例えば、坂口進氏が「天沼・上林家訪問記」（「上林晩研究」第十号、平成十四年三月）の中で語る、上林晩に会うことの興奮や感慨は、私のようなもはや書物の中でしか上林に会うことの出来ない者にとっては極めて羨ましい限りだ。昨年、第二回「上林研究会」が東京荻窪で開かれた際、私はそこで初めて睦子氏に御目にかかったが、青二才の私は緊張して、たぶん自己紹介の挨拶もせず失礼をしてしまったのではなかったか、それすらよく覚えていない有様なのである。研究会後、上林宅を訪問した折も、ああここで上林は執筆を続けたのか、とやはり何やら感慨にふけりもしていた。だから、そのような体験があること自体なら不自然なことであろうはずはなく、むしろ自身と作家を近しくさせる貴重な体験であるとかえ呼べるものであることは間違いないことである。おそらく、上林晩を顕彰する地元エネルギーの源も、そのようなところにあるのではないかと思われるが、そのエネルギーは今後ともあり続けてほしいものなのである。

しかし、いや、だからこそ敢えて失礼もかえりみず忌憚のない意見を述べさせてもらうならば、上林晩を語ること、あるいは上林文学を語ることが、ただそうした興奮や感慨を語ることだけでおわらせてはならない、とい

うことである。もちろん、上林晩と直接交流のあった者の興奮や感慨と、生前の上林に会うことなどできようはずもなかった私の興奮と感慨との間に温度差があるだろうことは、私とて容易に察しがつく。更に、上林をめぐる様々な証言は、たとえどれほど瑣末なものと思えようとも、今後上林を語るうえで、あるいは上林文学を語るうえで極めて貴重な情報・資料となり得ることは、いくら強調してもしすぎることはない。だから、失礼の上になんか生気なことを重ねて述べさせてもらうなら、まさに文字通り「生きた上林晩」を語ること、それが生前の上林を知る者にとつての責務であるとさえ言えるのかもしれないのである。

そのように考えれば、上林晩を私小説家とする評価の根拠さは、なるほど理解できるものかもしれない。上林晩を語ることと上林文学を語ることが不即不離の関係である限り、上林晩への興奮と感慨は、そのまま上林文学への興奮と感慨へとスライドさせることができるからである。私小説家という評価は、そのように語ることができる。まさに後ろ盾するものである。だがしかし、である。果たして、このような状況が、今後の上林晩を、上林文学を語るうえで、どれだけ生産的な議論へと発展させていくことができるのか。その点については、今や検討すべき段階にきているように思われる。

吉村稠氏「上林晩全国区へ」（「あかつき」大方あかつき館報第九号、平成十六年一月）と題した一文では、そうした段階への一つの取り組みとして「上林晩研究会」の活動が提唱された。そして今年、第三回目の研究会が地元大方町で開催されることとなる。「研究会」という場が、多種多様な上林晩を語る、生産的な議論の場となることを期待してやまないが、そのために必要なものとはいったい何か。それをここで少し述べておきたい。それは、ひとえに上林晩、上林文学に対する批評的な視点につきる、というものである。言い換えれば、対象との距離のとり方が問題だということである。上林晩と近くもあれば遠くもある、そうしたバランスのとれた議論を展開することこそが、今後上林晩を、あるいは上林文学を語るうえでの必須の条件となるのではないか、という

のが私の意見である。

例えば、一例として戦時中における上林の語られ方を考えてみてもいいが、とは言えそれ自体が極めて少ないものであり、そのため私の意見も少々強引な物言いになってしまうかもしれないが、一言で言えばそれは、反戦作家であった、というものであろう。確かに、戦時中の上林に戦争を賛美するような作品は見受けられず、また徴用作家として国策に従事させられることもなかったことからすれば、そのような語り方は一見妥当なように思えるかもしれない。更にこのような語り方の背景に、私小説家としての上林の評価、つまり困難な状況に耐え忍ぶ上林の姿を重ね合わせてみても、この語り方の妥当性は保証されるものかもしれない。実際、戦時下を背景としてあの「病妻もの」が生み出されたことを考えてみれば、私小説家としての上林晩、に揺るぎはないように思われる。ところが、当時の上林の発言をつぶさに見ていくと、意外にも時勢に沿った意見を述べていることに気付く。したがって、文学を通じての戦意昂揚めく上林の意見は、上林晩を反戦作家だとする語られ方そのものを相対化してしまふのである。ただし、だから上林は反戦作家ではなかった、と言うのではない。あるいは、国策に従事した作家として指弾しようと言うのでもない。そのような議論の性急さは、問題の短絡化を招くにすぎず、先ほど述べたような、生産的な議論へと発展させていくことからは程遠いと言わねばならない。そうではなく、客観的かつバランスのとれた議論を展開していくことが重要なのである。

その意味で、これまでのような上林晩を私小説家と見做す評価のあり方は、ある意味、上林晩という作家を、あるいは上林文学を極めて狭小な枠組みの中へと閉じ込めていたのかもしれないのである。だとすれば、そのような語り方は、今後上林晩を語るうえで、あるいは上林文学を語るうえで不幸だと言え、それは果たして言いすぎになるだろうか。むしろ私には、私小説家という評価から一度上林晩を解き放つことのほうが、上林晩を語る、あるいは上林文学を語る魅力に満ちているように思われるのだが。



今年の催し風景

第42回大方の秋まつり

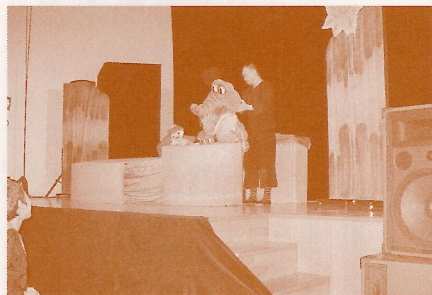
11月13日～14日 場所 ふるさと総合センター・大方あかつき館
町の総合文化祭として、町展や各種の催し物・出店などがあり、同時開催の健康ウォークにも多数の参加者がありました。
舞台芸能は、あいにくの天候で特設舞台では実施できませんでしたが、場所を変更して行い、吹奏楽の演奏とともに多くの人に楽しんでいただきました。



図書館企画展の開催

2005年2月27日午後より人形劇団ブークによるボードビルショーや人形劇「おれはママじゃない」の公演がおこなわれました。レクチャーホールいっぱいの来館者を迎え、みなさんに楽しんでいただきました。また、同時にワークショップもおこない、かわいいねずみの人形ができました。

2月27日～3月19日までのあいだはマザーグース展をおこない、ギャラリーにてビデオの上映や、複製絵本などの展示をしました。マザーグースうらないも、大盛況でした。



大方あかつき館報の原稿をご依頼しておりました濱田数義先生が、療養中の病院で2005年1月27日に亡くなられました。

まだ執筆途中で筆を折られたことは、大変残念に思われたのではないかとご推察申し上げます。

ここに哀悼の意を表し、ご冥福をお祈りいたします。

大方あかつき館職員一同